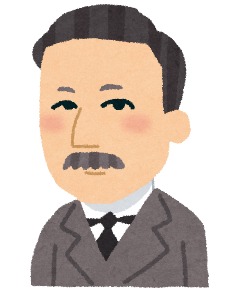
令和五年度　「くまナビ評価問題」中学校国語



一　次の文章は「吾輩は猫である」の一部である。この文章と、後に示される授業中の場面を読んで、問題に答えなさい。

途中の難しい言葉は、ぼくが解説するモン。それでは、いっしょに読んでいくモン。



注１「気焔」

燃え上がるような盛んな息のことだモン。

注２「御しやすい」

思うように扱いやすいことだモン

【夏目漱石からのメッセージ】

熊本県の中学生の皆さんへ。私は今から百三十年ほど前に熊本県で教師をしていました。そのときに、温泉を舞台に、「草枕」という小説も書きました。

今回は、私の小説家としてのデビュー作「吾輩は猫である」をもとに問題を解きながら、「読むこと」の力を高めていきましょう。

**【ここまでのあらすじ】**先生の家で暮らすことになった猫の「」は、ある日、家の裏にある茶畑で黒猫の「黒」と出会う。「黒」は大きな体格で、人力車を引く人に飼われている乱暴な猫である。それ以来「吾輩」は、たびたび「黒」に出くわすようになる。

ある日、例のごとく吾輩と黒は、暖かい茶畑の中で寝転びながらいろいろ雑談をしていると、彼はいつもの自慢話を、さも新しそうに繰り返したあとで、吾輩に向かって次のごとく質問した。

「おめえは今までにネズミを何匹とったことがある。」

知識は黒よりもよほど発達しているつもりだが①腕力と勇気とに至ってはとうてい、黒の比較にはならないと覚悟はしていたものの、この問いに接したる時は、さすがにきまりがよくはなかった。けれども、事実は事実でいつわるわけにはいかないから、吾輩は

「実はとろうとろうと思ってまだ捕らない。」と答えた。

黒は彼の鼻の先からぴんとつっぱっている長いひげをびりびりと震わせて非常に笑った。元来、黒は自慢をするだけにどこか足りないところがあって、彼を感心したように、のどをころころ鳴らしてしていれば、はなはしやすい猫である。吾輩は彼と近付きになってからすぐにこの呼吸を飲み込んだから、この場合にもなまじ、おのれを弁護してますます形勢を悪くするのもである、いっそのこと、彼に自分の話をしゃべらして②お茶をすにしくはないと思案を定めた。そこでおとなしく「君などは年が年であるから大分とったろう。」とそそのかして見た。



注３「彼は、墻壁の欠所に吶喊してきた」

予想どおり「黒」が誘いに乗ってきた、ということだモン。

注４「喟然として大息して」

ため息をついて嘆いてという意味だモン。

注５

交番にネズミを持っていく理由は、当時の衛生管理のため、ネズミを退治して交番に持っていくと、お金をもらえたからだモン。

案の定彼はの欠所にして来た。

「たんとでもねえが、三、四十はとったろう。」とは得意気なる彼の答えであった。彼は、なお語をつづけて「ネズミの百や二百は一人でいつでも引き受けるが、いたちってえやつは手に合わねえ。一度いたちに向かってひどい目にあった。」

「へえ、なるほど。」と相づちを打つ。黒は大きな眼をぱちつかせていう。

「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が石灰の袋を持って、縁の下へはい込んだら、おめえ、大きないたちの野郎が面くらって飛び出したと思いねえ。」

「ふん。」と感心して見せる。

「いたちってけども何、ネズミの少し大きいぐれえのものだ。こんちくしょうって気で追っかけて、とうとうどぶの中へ追い込んだと思いねえ。」

「うまくやったね。」としてやる。

「ところがおめえ、いざって段になるとやつめ、をこきやがった。臭えの臭くねえのってそれからってものは、いたちを見ると胸が悪くならあ。」

彼はここに至って、あたかも去年の臭気を今なお感ずるごとく、前足をあげて鼻の頭を二、三べん、なでまわした。吾輩も少々気の毒な感じがする。ちっと景気をつけてやろうと思って、

「しかし、ネズミなら君ににらまれては百年目だろう。君はあまりネズミをとるのが名人で、ネズミばかり食うものだからそんなにふとって色つやがよいのだろう。」

黒のごきげんをとるためのこの質問は、不思議にも反対の結果をみせた。彼としてしていう。

「考えるとつまらねえ。いくら稼いでネズミをとったって――いったい人間ほどふてえやつは世の中にいねえぜ。人のとったネズミをみんな取り上げやがっ交番へ持って行きやがる。交番じゃ誰が捕ったか分からねえから、そのたんびに五銭ずつくれるじゃねえか。うちの亭主なんかおれのおかげで、もう一円五十銭くらいもうけていやがるくせに、ろくなものを食わせたこともありはしねえ。おい、人間てものはのいい泥棒だぜ。」

さすが、無学の黒もこのくらいの理屈はわかると見えて、すこぶる怒ったようすで背中の毛を逆立てている。吾輩は少々気味が悪くなったから、いいかげんにその場をごまかして家へ帰った。この時から吾輩は決してネズミをとるまいと決心した。しかし黒の子分になってネズミ以外のごちそうをとってあるくこともしなかった。ごちそうを食うよりも寝ていた方が気楽でいい。

池田さんの学級では、「吾輩は猫である」の一部を読み、次の【学習課題】について各自で考えをまとめました。

【学習課題】

「吾輩」は「黒」に対して、どのような見方や接し方をしているか。また、そのような「吾輩」の接し方について、あなたはどう思うか。

「交番へ持って行きゃあがる」

当時は、公衆衛生上、ネズミ退治を奨励し、取ったネズミを交番で買い上げていたんだモン。

「喟然として大息して」とは、ため息をついて嘆いてということ。

その後、各自がまとめた考えについて、話し合いが行われています。

皆さんがまとめた考えの中には、根拠を加えたらもっと分かりやすくなるものがありました。例えば、

「吾輩」は「黒」を少し見下して接している。このような接し方は相手に失礼だと思う。

というまとめでは、「吾輩」が「黒」を「見下している」と捉えていますが、どこからそれが分かりますか。



先生

「元来黒は自慢をするだけにどこか足りないところがあって」という表現から、「吾輩」が「黒」を「見下している」ことが分かります。

池田さん

田中さん

他に、「【　　　Ａ　　　】」という表現も、「黒には知恵がない」という意味なので「見下している」と思います。



先生

二人の意見のように、「吾輩が黒を見下している」と捉える根拠があると、より相手に伝わりますね。

それでは、①「腕力と勇気とにいたってはとうてい黒の比較にならない。」とありますが、ここからも黒を見下しているといえますか。

中井さん

「腕力と勇気とにいたってはとうてい黒の比較にならない。」という表現からは、吾輩は、【吾輩が黒の力Ｂや勇気にはかなわないと】と思います。



根拠とする言葉が変わることで、「吾輩」の黒への見方や接し方に対する捉え方もひとつではないことが分かりますね。

先生

（１）文章中の傍線部②「お茶を濁す」の意味を、次のアからエまでの中から選び記号で答えなさい。

ア　後始末をせずに去ること　　イ　はっきりさせること　　ウ　ひと息いれて休むこと　　エ　都合の悪いことを取り繕うこと

（２）会話文中の【　Ａ　】には、「吾輩は猫である」の文章中の波線部で示しているいずれかの言葉が入ります。ふさわしいものを次のアからエまでの中から

選び記号で答えなさい。

　　　ア　暖かい茶畑の中で寝ころびながら　　イ　　「ふん。」と感心して見せる　　ウ　無学の黒　　エ　黒の子分になって

（３）【　Ｂ　】に入る言葉について、「吾輩は猫である」の文章中の傍線部①「腕力と勇気とに至ってはとうてい黒の比較にならない。」という部分から分かる

「吾輩」の「黒」に対する見方や接し方を考えて書きなさい。

（４）あなたは、「吾輩」が「黒」に対してどのような見方や接し方をしていると考えますか。また、そのような見方や接し方についてどう思いますか。

次の条件に従って、自分の考えを述べなさい。

（条件）　❶　二段落構成とし、一段落目には根拠となる言葉を引用して、「吾輩」の「黒」への見方や接し方を書くこと。

なお、引用した根拠の部分は「　　」でくくること。

　　　　　　　❷　二段落目には、そのような吾輩の見方や接し方について、あなた自身がどう思うかを具体的に書くこと。